

國學院大學學術情報リポジトリ

月の船：漢語と和語の交流の場をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大谷, 歩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001547

月の船

—— 漢語と和語の交流の場をめぐって ——

Ship of The Moon--About a Place Where Japanese Word Crosses Chinese Word

大谷 歩

要旨

本稿は、『万葉集』と『懷風藻』にみえる「月船」「月舟」の語をめぐって、漢籍に出典を持つ漢語の受容から離れて、日本独自の〈和風詩語〉が生み出される状況を、古代日本の漢語と和語の交流の問題から考察するものである。

『万葉集』における「月船」、『懷風藻』における「月舟」の語は、いずれも研究史上漢籍に未見の語であるとされている。これは、漢籍に未見の漢語が、古代日本の詩歌にのみ存在したことを意味するものである。そしてそれは、古代日本の文学営為の中において、日本独自の〈和風詩語〉が生成されていたことを示唆するものである。

この〈和風詩語〉が生成される古代日本の文学の状況には、四つの和漢文化サロンの場が考えられ、①宮廷サロン、②皇子サロン、③王族サロン、④貴族サロンがあり、そこには同じ主題に沿って詩人が詩を詠み、歌人が歌を詠むという漢と和の交流関係が文献によって確認される。それらの作品には、同じ発想を詩と歌に詠むという《合わせ》の方法が獲得されている事例が認められる。この和漢文化サロンにおける《合わせ》の方法の獲得により、古代日本の文学は漢籍を典拠としない、新たな〈和風詩語〉を創造する段階へと展開することを可能としたのである。

摘要

本文通过探讨日本古代汉语与和语的交流问题，围绕《万叶集》和《怀风藻》中的“月船”“月舟”两词，考察这种脱离了汉籍里汉语的影响，而产生

キーワード：月船(月舟) 和漢文化サロン 和風詩語 合わせ 和と漢の交流の場

关键词：月船(月舟) 和汉文化沙龙 和风诗语 对诗(歌) 和与汉的交流场所

出日本独有的所谓的“和风诗语”的情况。

《万叶集》中的“月船”、《怀风藻》中的“月舟”，在研究史上都被认为是汉籍里未曾出现过的词。它意味着汉籍中未曾出现的汉语词汇，只存在于古代日本诗歌之中。并且它暗示了古代日本文学在其发展过程中，形成了日本独特的“和风诗语”。

在形成“和风诗语”的日本文学之中，一般认为有四个和汉文化沙龙，即①后宫沙龙、②皇子沙龙、③皇族沙龙、④贵族沙龙。从文献上看，我们可以得知，在这里，依据同一主题，人们通过诗人吟诗、歌人诵歌的形式进行着汉和的交流。这些作品里依据同一构思，来获取吟诗、作歌的所谓“赛诗（歌）会”的事例也受到了重视。古代日本文学不以汉籍为出典，而展开创造新的“和风诗语”的时期，通过这种和汉文化沙龙中“赛诗（歌）会”方法的获取而成为了可能。

1 はじめに

古代の日本には〈歌〉という文芸表現があり、これは『古事記』や『日本書紀』にみられる歌謡の流れを汲む文芸表現である。そのような古代歌謡は、やがて日本最古の歌集である『万葉集』へと展開し、和歌と呼ばれるやまとの歌の原型を形成した。和歌という名称は平安期に至り固有名詞化して定着するが、『万葉集』の段階では和歌という名称は存在しない。しかし、『万葉集』には枕詞や序詞などの表現技巧や五・七の定型化などが進み、和歌の基本的な表現を形成したといえる。また、一方に『万葉集』と時代を同じくして中国詩に学んだ〈詩〉という新たな文芸形式が登場し、7世紀から8世紀の古代日本にはこの歌と詩という二つの異なる韻文形式が存在したのである。

この歌と詩は異なる文芸ジャンルではあるが、その両者は同じ環境の中にあって、詩歌の主題や素材を等しくする場合も、あるいは詩語と歌語とが交流する場合も認められ、ここには歌と詩の交流という古代日本の特殊な文芸環境が成立するのである。そうした歌と詩との交流の関係は、中国詩を出典として詩と歌が交わる事例や、詩語と歌語とが交流する事例がみられ、そのようにして古代日本の文芸は成長したのである。

『万葉集』の歌の言葉（歌語）に漢詩的な表現（詩語）をたびたび目にするのは、すでに古代日本の歌が漢文文献と深い交流のなかにあることを示す

ものである。それは、漢字を受容して歌を表記するという、書く意識に支えられた受容の在り方として、至極自然なことであった。これは『懷風藻』の詩語も中国詩文を学び、それを教養として新たに自らの詩を作り上げる過程で、既存の漢語を用いたことは当然といえる。しかし、中国文献に出自を持つ漢語が多く見出されるのに対して、中国文献に典拠を見出し得ない漢語が古代日本文献に存在することもまた事実である。

そのような事例の一つに、「月船・月舟」の語がある。『万葉集』には「月船」を詠んだ歌があり、また一方に『懷風藻』にも「月舟」を詠んだ詩がある。このように具体的な言葉を共有して詩と歌が詠まれるのは、両者に交流した痕跡が示されている例として注目されよう。この「月船」や「月舟」の語もまた、中国文献には見出されない孤立した漢語の一つである。このような〈和風詩語〉ともいえる熟語が生成され⁽¹⁾、古代日本の文芸の中に広まり、詩歌の表現として成立する背景には、いかなる事情が存在したのであろうか。本稿では『万葉集』と『懷風藻』にみられる「月船」「月舟」の語を一つの事例として、古代日本の歌語や詩語の形成について以下に考察したい。

2 『万葉集』の「月船」と『懷風藻』の「月舟」

『万葉集』には、「月船」（月の船）という歌語が三首の歌に詠まれている。古代日本の文献においては、天体に関する興味は希薄であるから、このような「月の船」という発想は特殊な問題として注目されるのである。

天を詠める

I 天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ

（巻7・1068／人麻呂歌集）

詠天

天海丹 雲之波立 月船 星之林丹 榜隠所見

II 春日なる三笠の山に月の船出づ 遊士の飲む酒杯に影に見えつつ

（巻7・1295／作者未詳）

(1) 小島憲之は、『懷風藻』の漢語の中で中国語の用法をそれた、懷風藻詩人に特有の語彙を「和臭(和習)」と呼んでいる(『上代日本文学と中国文学 下』1965、塙書房)。

春日在 三笠乃山二 月船出 遊士之 飲酒坏尔 陰尔所見管

月を詠める

Ⅲ 天の海に月の船浮け桂楫かけて漕ぐ見ゆ月人壮子

(巻10・2223／秋雜・作者未詳)

詠月

天海 月船浮 桂楫 懸而滂所見 月人壮子⁽²⁾

Iは7世紀後半ころの歌と想定される人麻呂歌集所出の「天詠」と分類された歌で、天の海に雲の波が立ち、月の船が星の林に漕ぎ隠れてゆくのが見えるという内容であり、天を海に、雲を波に、月を船に、星を林になぞらえて詠まれている。また、この歌の漢字本文によると、「天海」「雲波」「月船」「星林」という漢語的な表現がみえ、漢語を和語へと置き換えたともいえる方法で歌が詠まれている。IIは8世紀前半ころの歌と想定される作者未詳の旋頭歌で、春日の三笠山に月の船が出て、風流な男たちの飲む杯にその月影が映っている様子が詠まれている。ここでも月が船として形容されており、また宴の場において詠まれた歌であることが理解される。この歌も、漢字本文に「月船」「遊士」「酒坏」とあるように、漢語的な表現を和語に置き換えて詠まれているとみることができる。IIIは成立年代不明の作者未詳歌で「詠月」と分類された歌であり、Iと同じく「天海」に「月船」を浮かべ、それを楫で漕いでゆく情景を詠んでいる。ただし、ここではその船の漕ぎ手は、「月人壮子」とされている。ここでも、漢字表記は「天海」「月船」「桂楫」「月人」「壮子」のように、漢語的な表現がみられるのである。

このように、『万葉集』における「月の船」は、天を海とし、雲の波が立つ海に月の船が星の林を渡ってゆくと詠まれるものであり、海原の情景を天空へと写し取っているかのような発想がうかがえる。月を船に、天を海に見立てる発想、そしてIからIIIにみられる漢語的な表記方法によって、従来「月船」には漢語的要素があると目されながら、漢文文献にその明確な出典は見出されていない状況にある。

一方、『懷風藻』⁽³⁾の文武天皇の「詠月」の詩には、月を船とする発想に基

(2)『万葉集』の引用は、中西進『万葉集 全訳注原文付』(講談社文庫)に拠る。以下同じ。

(3)『懷風藻』の引用は、辰巳正明『懷風藻全注釈』(笠間書院)に拠る。以下同じ。

づいた「月舟」という詩語がみられる。

五言。詠月。一首。 文武天皇（詩番 15）

IV月舟移霧渚。楓楫泛霞浜。 月舟霧渚に移り、楓楫霞浜に泛ぶ。
台上澄流耀。酒中沈去輪。 台上流耀澄み、酒中去輪沈む。
水下斜陰碎。樹除秋光新。 水下斜陰砕け、樹除秋光新たし。
独以星間鏡。還浮雲漢津。 独り星間の鏡を以て、還りて雲漢の津に浮
かぶ。

この詩は、「月の舟は霧の渚に移りゆき、楓の楫は霞の浜辺に浮かんでいる。宴席の卓上には月光が輝き、盃には月が沈んでいる。水の流れに月影は砕け、木の間から秋の光りが差しはじめた。月は独り星々の間に浮かぶ鏡のように輝き、めぐっては雲の立ちこめる天漢の岸辺に浮かぶ」という内容である。この詠月詩において、月を舟にたとえること、その月が星の間をめぐり、天漢——即ち天の漢水（天の川）の船着き場に浮かぶことなどが詠まれ、『万葉集』のⅠの歌に類似した発想がみられる。

このⅣ文武天皇の詠月詩には、漢文文献に出典のみられない語が多く詠まれている。「月舟」「霧渚」「霞浜」「去輪」「樹除」などがそれであり、文武天皇が創造した独自の詩語である可能性が考えられる。

この『万葉集』と『懷風藻』とに詠まれた「月船」「月舟」の語は、漢文文献には見出されない和製の漢語であることが想定されるものであり、古代日本の歌と詩とを繋ぐ言葉として特に注目されるものである。これは中国文学の表現方法を踏まえながらも、古代日本が独自の漢語を創作する段階にあったことを想像させる。そこには、漢文文献に出典を持つ漢語の受容から離れて、〈和風詩語〉が生み出される状況が存在したように思われる。さらには、古代日本の文芸創作の状況において、漢語と和語の交流の場が存在したことが想定されるのである。

『万葉集』における「月船」の理解を確認してみると、武田祐吉氏の『増訂 万葉集全註釈』ではⅠの歌を「七夕の会の作」であろうと推測し⁽⁴⁾、辰巳正明氏もⅠの歌を「本来七夕の歌であろう」とし、Ⅰの「月船」「星林」は未詳の漢語であることを指摘する。さらに辰巳氏は、Ⅰの歌が人麻呂歌集

(4) 武田祐吉『増訂 万葉集全註釈』第六卷(1956年、角川書店)。

の歌であることから、柿本人麻呂が持統・文武朝に仕えた歌人であることを考慮し、Ⅰの「人麿歌集の歌が意図的に漢文学の表現に近づけている」のは、その詠出された場が「漢文学が中心となる場であったからにほかならない」として、人麻呂歌集のⅠの歌が、「大陸文化のサロンで、漢詩文に沿うように創作された歌である」と述べているのは、当時の文化状況からの判断である⁽⁵⁾。

このように、「月船」は漢語的表現でありながら出自不明の漢語とされ、それは月を船に喩えた表現であり、そのような情景が詠まれるのは七夕の宴であると理解されている。この七夕の場という理解は、Ⅲの歌に「月人壮子」とあり、「月人壮子」は『万葉集』の七夕歌に詠まれる特徴的な表現であることによる。Ⅲの他に『万葉集』には「月人壮子」を詠んだ歌が以下のように四例存する。

1 夕星も通ふ天道を何時までか仰ぎて待たむ月人壮子 [月人壮]

(巻10・2010／人麻呂歌集・秋雜・七夕)

2 秋風の清けきゆふへ天の川舟漕ぎ渡る月人壮子 [月人壮子]

(巻10・2043／秋雜・七夕)

3 天の原い行きて射むと白真弓ひきて隠せる月人壮子 [月人壮子]

(巻10・2051／秋雜・七夕)

七夕の歌一首

4 大船に真楫繁貫き海原を漕ぎ出て渡る月人壮子 [月人乎登祐]

右は、柿本朝臣人麿の歌

(巻15・3611)

ここで注目されるのは、前掲Ⅲ以外の「月人壮子」の四首すべてが、七夕の歌であることである。そのうち1と4の二首が前掲Ⅰと同じ人麻呂関係歌であり、2と4の「月人壮子」は前掲Ⅲと同じく、舟を漕ぐ存在として詠まれている。このことから、『万葉集』における「月船」の三首は、題詞に「七夕」と明記される歌はないものの、七夕の宴を背景としながら成立した可能性が高いと判断されるのである。一方『懷風藻』の「月舟」についての指摘は多くないが、辰巳正明氏の『懷風藻全注釈』⁽⁶⁾では、前掲Ⅳの「月舟」の語釈において「七日の月を舟に喩える。七夕の夜の風景」とし、また『万

(5) 辰巳正明「文武天皇文化サロンの詩と歌」『万葉集と中国文学 第二』(1993年、笠間書院)。

(6) 辰巳正明『懷風藻全注釈』(2012年、笠間書院)。

葉集』の前掲Ⅰの歌が人麻呂歌集所収歌であることから、持統・文武朝に活躍した柿本人麻呂の歌の場としての「文武天皇文化サロン」を想定している。さらに辰巳氏は前掲Ⅳの詩の解説において、「月舟」が漢語に未見であることを指摘し、次のように述べている。

人麿は軽皇子（文武天皇）の文化圏に所属していたことが知られるから、その軽皇子文化圏に月船の語が醸成されたものと思われ、一方は歌へ一方は詩へ展開したのである。それを媒介したのは、天武朝ころから始まる七夕の場であったと思われる。

辰巳氏は七夕の宴の場を、歌と詩の交流の場として位置付け、そこから「月船」や「月舟」の語が生まれ、人麻呂歌集所収歌及び文武天皇詠月詩へと流れ込んでいったという経緯を論じている。古代日本の七夕伝説及び七夕の宴の広がり鑑みれば、この指摘は妥当なものであるように思われる。

このように、前掲Ⅳの「月舟」も月を舟に見立てた語であり、出典未詳の漢語として扱われながらも、その状況は『万葉集』の「月船」と同じく七夕との関わりを考える段階にある。この前掲Ⅳと中国渡来の七夕との関係については、中国詩の七夕詩や『懷風藻』の七夕詩から、その共通性をみることができる。たとえば、前掲Ⅳに詠まれる「秋光」は唐の沈叔安「七夕賦詠成篇」に「皎々宵月麗秋光」とあり、「雲漢」は宋の謝恵連「七月七日夜詠牛女」に「雲漢有靈匹」とある。また「楓櫂」は「桂楫」のことで、月に桂が生えているという中国の伝説により、月と桂は縁語として用いられている。そのような発想は戦国時代の屈原の「湘君」にみる「沛吾乗兮桂舟」の「桂舟」や、陳の張正見の「後湖泛舟詩」にみる「沈槎触桂舟」の「桂舟」があり、同じく屈原の「湘君」には「桂櫂兮蘭枻」という「桂櫂」があり、桂と舟あるいは桂と櫂という類想の語が存する。つまり、桂を楫にすること、また桂を舟とすることは既に中国詩の発想にあることが確認できる。また『懷風藻』の山田史三方の「七夕」の詩には「銀河月桂秋」（銀河月桂の秋）と、月の桂が秋の景として詠まれ、さらに「玲瓏映彩舟」（玲瓏彩舟に映ず）とあるように、織女が乗る彩舟が詠まれている。このような詩語の連関性によって、「月」と「桂」が結びついて「桂舟」を導き、「桂舟」は「月」を「船」へと導き、それはやがて「月舟（船）」への転換を容易にしたのである。ここに、「月船」「月舟」へと至る発想の基盤は整えられていったものと推測されるのである。そこには、「月船」や「月舟」の語の成立の背景として古代

日本の詩と歌との交流の場が存在し、「月船」や「月舟」の語は詩と歌の場と深く関わることにより醸成されたことが考えられるのである。

3 漢と和の交流と和風詩語の生成

このような詩と歌の交流の場を考える時の一つの指標として、〈和漢文化サロン〉の存在を挙げることができる。「月船」や「月舟」の語も、そうした文化サロンの中に成立したものと考えられる。この和漢文化サロンは、現在確認できる文献からは四つの場の分類が可能であると思われる。一に宮廷文化サロンがあり、これは外廷・内廷における、宮中の行事や儀礼の宴などによる文化サロンである。このことは『続日本紀』の記録の中から見出すことができる。二に皇太子・皇子女文化サロンがあり、これは皇太子や天皇の皇子女たちが主宰する文化サロンである。その代表的なサロンは、天武天皇の皇子である大津皇子が開いたであろう文芸の場が指摘できる。このことは『懷風藻』の大津皇子伝から見出すことができる。三に王族文化サロンがあり、これは天皇の孫たちによるサロンを指す。殊に高市皇子の子である長屋王の作宝楼における詩宴の場が著名であり、多くの文人が参加している。これも『懷風藻』の長屋王邸の詩から見出すことができる。四に貴族文化サロンがあり、これは各氏族たちが主宰するサロンのことである。たとえば、大宰府歌壇を形成した大伴旅人や、藤原一族のサロンがそれに当たる。これは『万葉集』や『懷風藻』の詩歌から見出すことが可能である。これら四つの文化サロンの状況について、以下に確認してゆきたい。

まず皇太子文化サロンや宮廷文化サロンの漢詩と和歌との交流の場については、七夕の宴を例にとることができる。

a 『万葉集』 卷 8・1518 番歌

山上臣憶良の七夕の歌十二首

天の川相向き立ちてわが恋ひし君来ますなり紐解き設けな

〔一は云はく、川に向ひて〕

右は、養老八年七月七日に、令に応ふ。

b 『続日本紀』 聖武天皇天平六（734）年記事

秋七月丙寅、天皇、相撲の戯を觀す。是の夕、南苑に徙り御しまして、文人に命せて、七夕の詩を賦せしめたまふ。祿賜ふこと差有り。⁽⁷⁾

これは『万葉集』及び『続日本紀』の七夕にまつわる歌とその記事である。aの山上憶良の七夕歌の左注には「令に応ふ」とあり、これは「応令」のことで、皇太子の命によって歌を献上したことを意味する。この時の皇太子は、のちの聖武天皇である首皇子である⁽⁸⁾。すなわち、憶良は皇太子の命によって七夕の歌を献上したのであり、それは皇太子を中心とする七夕の宴の場であったと考えられる。bの『続日本紀』には、即位した聖武天皇が天平六年の七夕の日に、文人に命じて七夕の詩を作らせたとある。この二つの文献からは、聖武天皇は皇太子御所および宮中行事において七夕の詩歌を献上させる詩歌の場を開いていたことが確認できるのである。

次は皇子文化サロンの例として、大津皇子の文芸サロンがある。皇子は『懷風藻』や『日本書紀』の伝によれば文武に勝れた皇子で、特に文章を愛し、「詩賦の興」とまで称えられている。「詩賦の興」というのは、古代日本の漢詩を興したという意味であるが、それは優れた漢詩文を作ったという彼の能力に基づいての評価であろうと思われる。

c『万葉集』巻8・1512 番歌

大津皇子の御歌一首

経もなく緯も定めず少女らが織れる黄葉に霜な降りそね

d『懷風藻』詩番6

七言。述志。 大津皇子

天紙風筆画雲鶴。 天紙風筆雲鶴を画き、

山機霜杼織葉錦。 山機霜杼葉錦を織る。

これは大津皇子が『万葉集』と『懷風藻』に残した、黄葉を詠んだ詩と歌である。大津皇子は『万葉集』と『懷風藻』に四首ずつ詩歌を残しており、『万葉集』のcでは「織れる黄葉に霜な降りそね」とうたい、『懷風藻』の

(7)『続日本紀』の引用は、新日本古典文学大系本(岩波書店)に拠る。

(8)当該左注には「養老八年」とあるが、「養老八年」は改元のため存在せず、神亀元年に当たる。養老六年もしくは七年の誤りかと思われる。なお、養老年間の皇太子は首皇子、後の聖武天皇である。首皇子は和銅7(714)年6月に立太子。神亀元(724)年2月に聖武天皇として即位する。

d では「山機霜杼葉錦を織る」と詠むように、黄葉の彩りを錦を織ることに擬えた、類似する発想の詩と歌とが存在する。類似する発想の表現が、同一人物の歌と詩に残されていることは極めて稀なことであり、これは明らかに詩と歌が共有される場において詠まれたことを示唆している。さらに、d の詩にみえる「織葉錦」という表現の「葉錦」の語は漢文文献にはみられない語であり、また「少女たちが黄葉を織る」という発想も、『万葉集』や漢文文献に類をみない、大津皇子の創造による独自の発想である。このことから、『懷風藻』に詠まれる「葉錦」という語は、「黄葉を織る」という皇子の発想によって、秋の黄葉の美しさを表現する言葉として皇子の詩と歌の関係において独自に交流しているのだと考えられ、漢語と和語の交流によって生まれた新たな〈和風詩語〉の一つであるとみられる。これは漢と和が共有される歌の場において、同じ主題を持ち、その主題に基づきながら同じ発想が詩と歌とに重ねられ、いわば〈合わせ〉ともいうべき方法により獲得された表現であろうと思われる。

次に王族文化サロンの例として、長屋王邸サロンがある。これは長屋王の別邸の作宝楼におけるサロンであり、特に作宝楼は詩を詠むために作られた文化施設であったと思われる。

e 『万葉集』 卷 8・1519 番歌

山上臣憶良の七夕の歌十二首

ひさかたの天の川瀬に船浮けて今夜か君が我許来まさむ

右は、神亀元年七月七日の夜に、左大臣の宅。

f 『懷風藻』 詩番 69

五言。初春於作宝楼置酒。 長屋王

景麗金谷室。年開積草春。 景は麗し金谷の室、年は開く積草の春。

松烟双吐翠。桜柳分含新。 松烟双びて翠を吐き、桜柳分かれて
新たなるを含む。

嶽高閣雲路。魚驚乱藻浜。 嶽は高し閣雲の路、魚は驚く乱藻の浜。

激泉移舞袖。流声韵松筠。 激泉に舞袖移せば、流声松筠に韵く。

長屋王邸で七夕の宴が催されたことは、e の山上憶良の七夕の歌の左注に

みえ、この「左大臣」は長屋王を指す。一方 f の『懷風藻』には王邸で七夕の詩が詠まれた記録は残されていないが、憶良の歌から王邸でも七夕の宴が開かれたことが推測される。長屋王の詩題に「初春作宝楼置酒」とあるように、王の別邸の作宝楼において文人や外国の使節を招き、宴を開いていたことが『懷風藻』の詩から知られる。長屋王邸の詩は『懷風藻』に 18 篇も残されており、王邸サロンの繁栄の面影をみることができよう⁽⁹⁾。このことから、長屋王邸ではたびたび詩宴が開かれ、また e の山上憶良の歌からは、そこで歌が詠まれていたことも予想されるのである。

こうした王族たちの間では、詩を詠むための別邸である山斎という庭園を設けることが流行した。詩と環境とは密接な関係を持つことから、庭園の造営は王族たちに欠かすことの出来ない文芸の場であったのである。

最後に貴族文化サロンの例として、藤原房前邸の宴を取り上げたい。

g 『万葉集』巻 9・1764-65 番歌

七夕の歌一首并せて短歌

ひさかたの 天の川に 上つ瀬に 珠橋渡し 下つ瀬に 船浮け居ゑ
雨降りて 風吹かずとも 風吹きて 雨降らずとも 裳濡らさず 止ま
ず来ませと 玉橋わたす

反 歌

天の川霧立ち渡る今日今日とわが待つ君し船出すらしも

右の件の歌は、或は云はく「中衛大将藤原北卿の宅の作なり」といへり。

h 『懷風藻』詩番 85

五言。七夕。 藤原朝臣総前

帝里初涼至。神衿翫千秋。 帝里初涼至り、神衿千秋を翫ぶ。
瓊筵振雅藻。金閣啓良遊。 瓊筵雅藻を振り、金閣良遊を啓く。
鳳駕飛雲路。龍車越漢流。 鳳駕雲路に飛び、龍車漢流を越ゆ。
欲知神仙会。青鳥入瓊楼。 神仙の会を知らんと欲して、青鳥瓊楼に入る。

(9) 長屋王邸で詩宴が開かれていたことが確認できる作品として、境部王「五言。長王宅一首」(詩番 50)、山田史三方「五言。秋日於長王宅宴新羅客一首并序」(詩番 52)、調忌寸古麻呂「五言。初秋於長王宅 宴新羅客」(詩番 62)、長屋王「五言。於宝宅宴新羅客一首」(詩番 68)などがあり、他には詩番 60・63・65・71・75・77・79・82・84・86・90・104・106 が存する。

g の「七夕の歌」と題される歌の左注に、「中衛大将藤原北卿の宅の作なり」と伝えられるものがあり、この藤原北卿は房前（総前）を指す。房前は『懷風藻』において七夕の詩を詠んでおり、g の歌と h の詩とが同じ場で詠まれたかは知られないが、少なくとも、房前の周囲には七夕の日の宴において、詩と歌とが交流する場が存在したことは認められるであろう。

このように、古代日本の和漢文化サロンには四つの場があり、そこでは七夕の詩歌の宴を中心に、詩と歌が共に詠まれる場が存在したことが推測される。大津皇子の詩と歌のように、同じ発想を詩と歌とによって詠むという営みが既にはじまっていることから、和漢文化サロンにおける詩と歌の交流は、あらたな〈和風詩語〉を生み、さらには詩と歌が一对の関係を持つ〈合わせ〉の方法を獲得してゆく状況がみられるのである。

それでは、『万葉集』の「月船」と『懷風藻』の「月舟」については、どのように考えるべきであろうか。これまでみてきたように、漢と和が同様の主題のもとに一对の表現を取る現象を〈合わせ〉の方法とみるならば、この「月船」と「月舟」の語は、まさに漢と和の交流の場によって生成されたものであるといえよう。この〈合わせ〉の関係を作品の言葉に沿ってみてゆくならば、『懷風藻』Ⅳの「月舟」は『万葉集』ⅠⅡⅢの「月船」に該当し、Ⅳの「楓檝」はⅢの「桂楫」に、Ⅳの「酒中沈去輪」はⅡの「飲む酒坏に影に見えつつ」に、Ⅳの「星間」はⅠの「星の林」に、Ⅳの「雲漢津」はⅠの「天の海に雲の波立ち」にそれぞれ対応し、重なり合う表現であるといえる。この対応関係は、七夕という主題によって、詩と歌が一对の対応関係を保ちながら成立する〈合わせ〉という方法によって、成立したことが考えられる。ここには、七夕を主題とし、歌と詩が共に詠まれる場において、あるいは場を異にしながらもその影響関係において、〈月を船に見立てる〉という発想が共有されたことによって、そこから「月船」や「月舟」という新たな〈和風詩語〉が成立したのであろう。この〈合わせ〉の方法とは、同じ主題に基づきながら同じ発想を詩と歌とに詠み合うもので、そこには主題に沿った表現世界が展開することとなる。和語と漢語が相互関係的に交流しながら新たな文芸世界を展開させてゆく方法が、この〈合わせ〉という方法であった。魏晋時代以降の中国文人の文学形成の要因の一つに集団性があることを思えば、古代日本の文人たちの文学形成もまた、集団的文学運動の中に存在したのである。その集団的文学運動が、漢と和とを交えた場であったところに特

色をみるのである。

この漢と和との交流関係は、古代日本の和漢文化サロンにおいては、年中行事や季節の宴などを中心とした詩歌の宴が開かれたことを基盤としていると思われる。そこではある行事や季節に主題を採りながら、詩や歌が披露されていたと推測される。この宴では歌を詠む歌人、詩を詠む詩人のいずれもが参加していたものと考えられ、詩人や歌人たちは宴にふさわしい詩歌を披露していたのである。それが、『万葉集』や『懷風藻』に残された和漢文化サロンの詩や歌であり、彼らは宴の場を通して、同じ主題のもとに詩や歌を作ったのであろう。黄葉の錦を織るという発想や、月を船に見立てるという発想が共有されるのは、まさに漢と和が一对となって成立する〈合わせ〉という方法によるものと考えられるのである⁽¹⁰⁾。

このように考えると、『万葉集』の「月船」の歌三首と文武天皇の「詠月」の詩は、文武天皇の文化サロンにおいて、七夕の宴を背景として詠まれたものであると考えられ、そこには異国趣味といえる「七夕」を主題として、その題に基づいて詩と歌とが競作された可能性が考えられるのである。

5 おわりに

本稿では『万葉集』と『懷風藻』にみられる「月船」と「月舟」を詠んだ詩歌を取り上げ、詩と歌の交流の場の状況を考察した。『万葉集』の「月船」も『懷風藻』の「月舟」も、いずれも漢語的表現であると目されながらも、漢文文献にはみられない言葉であった。また、これらは七夕の宴を背景に持ちながら成立した可能性が考えられており、その指摘は妥当なものであるといえる。しかし、この漢文文献に未見の「月船」や「月舟」が古代日本の中で共有され、詩歌に用いられるに至る背景には、古代日本の詩と歌との交流の場という問題が深く関わっていたのである。これは〈和漢文化サロン〉と呼ぶことが可能であろう。

古代日本にはこの〈和漢文化サロン〉の存在した形跡が認められ、それは①宮廷文化サロン、②皇太子・皇子女文化サロン、③王族文化サロン、④貴

(10)この〈合わせ〉という概念は、『万葉集』の末期に大伴家持による漢と和の交流する歌の形成を論じる辰巳正明氏の「外見が似ていることをもって一合わせの美学」(『詩靈論 人はなぜ詩に感動するのか』2004、笠間書院)があり、本稿では『万葉集』と『懷風藻』とが交流する問題から考えた。

族文化サロンの四つの場に分類される。そして各サロンでは、詩と歌とが同じ場に共有されたことが確認でき、そこには同じ発想を詩と歌に詠むという〈合わせ〉の方法が獲得されていたのである。「月船」や「月舟」の語は、この〈合わせ〉の方法によって、七夕という主題を共有した歌人と詩人が、七夕の日に〈月を船に見立てる〉という同様の発想のもとに、詩と歌に詠んだものと考えられる。ここに、漢と和の交流によって〈和風詩語〉としての「月船」と「月舟」が生成されたのだといえる。このような古代日本の詩と歌は、中国詩や漢籍を踏まえながらも、新たな〈和風詩語〉を意識的に創造する段階に入り、漢と和の交流を通して新たな文芸への展開を可能としたのである。